

使者が無事に玄徳軍が成都に着いたとの連絡を持ってきた。花からも「着きました」と、まだまだどどしい文字の報告書が届いている。

ここからが問題だけれど、あの子ならば大丈夫だろう。

彼女は、きつと玄徳様を動かす。

彼女の想いは人を動かすだけの力があるのだ。亮が自分の道を見つけ出した時のように。

孔明は目を閉じた。この先はボクの仕事だ。

孔明が思い描く通りに世界を動かす。

中華全土を掌握しようとする曹孟徳と未だ覇権を目指す孫家を牽制出来るだけの力を、玄徳軍は持たなければならぬ。益州は鉄や塩の資源も多く、西域との交易の要所でもあり、力を蓄えていくことは可能だ。

その蜀の豊かな資金を以て玄徳様は猷帝の後ろ盾となり、漢王朝の権威を上手く利用しつつ猷帝からも魏、呉を抑えてもらう。蜀が目障りでも、資金力と地理的要因のおかげで、簡単には攻められないはずだ。

三国間の争いがなければ、流民も減り、治安も安定していく。

戦の起きない世の中。理不尽に人が死ぬようなことがない世界。常に綱渡りだけれど、そのために全力を注ぐことは、意味のあることだ。

ボクの父上が殺されるような世界は嫌い。間違っていると、貴方は言ってくれた。

そうだね、ようやく見えてきた。

君が語ってくれた夢のような世界に、少しでも近づける。

「花」と約束したのだ。戦のない世界を作る。ボクもその道を行く。そのためにボクもがんばると。

——君がいなくなっても。

正直に言えば、もう限界だった。

「お師匠様をいたわってよ」と、戯れのように膝枕をさせた。

花の膝はやわらかくて、とても気持ちよかった。

ただ一回だけのつもりだった。その後は、もう、自分の気持ちを抑えるつもりだったのだ。花自身にも「好きな人はこ

こにはいない」と宣言した。

それなのに、花の瞳に浮かんだ苦しそうな色に、罪悪感が浮かぶばかりだった。手を伸ばしたいと思ってしまった。孔明に膝を貸したまま、眠ってしまう花の無防備さに付け込みたいとまで、思ってしまった。

ひと時だけの恋人のふり。

でも、結局一回では押さえられなかった。彼女への想いはどんどん膨らんで、耐え難いほどになっていった。

額に口付けをした。

朝の逢引きに見せかけ、身体を寄せ合った。

おまじないだの、見合いさせようとしつこい御仁を追い払うためだの、そんな言い訳で暴挙を許してしまう花の無防備さに呆れたりもした。

花の想いを知っている。

花を手に入れようと思えば、それは簡単なことだ。でも、できる訳がない。

既に彼女を帰す方法の検討はついでている。

洛陽で彼女が消えたとき、花が片時も離さず持っているあの書から光が溢れ出てきたように見えた。あの書が彼女が時を飛び越えるための鍵になつていようだ。

普段は書を開いても何も起きないようなので、何かきつかけがあるのだろうか。あの時の花も驚いた顔をしていたので、彼女の意思とは無関係の何かが起因となり、あの書が彼女を運び去るのだ。

その起因も、きつと見つけられる。見つけてみせる。

花は花の世界で、平和で、人が死ぬようなことが遠い夢のような世界で、笑つて生きていく。

この世界に希望をくれた、彼女の未来のために。

ボクが花の師匠になると、花を導くと、決めたのだ。

花が迷つた時に、彼女を導く存在。ボクが亮だつた時に、花がそう言つてくれたのだから。

ボクはそれだけで満足をしている。花を師匠に持ち、ボクが花の師匠になつた。一体どれだけたくさんのものを彼女からもらったのだろう。

ボクは大丈夫。君の言葉、君の笑顔、君の想い。ちゃんと覚えてる。忘れない。

もう、充分だ。

ボクがボクを抑えていられるうちに、ちゃんと手放さないといけない。

どうかしあわせに。
そう願つている。

*

ふう、と孔明はため息をついた。

成都の有力な商人との面会から帰つてきたばかりだ。

机の上には、執務室を出る前にはなかつたはずの書簡の山が形成されていた。氣を利かせた花が分類ごとに書簡を分けておいてくれたので、小山がいくつもある。どかりと大きな山が形成されていないだけ、ずいぶん助かる。のだけれど。

孔明のため息に氣付いた花が、氣遣わしげな視線を送つた。

「師匠、お疲れですね」

「まあねえ。仕事をしてもしても、どんどん増えていくんだから」

孔明は、恨めし氣に机の上の書簡の小山たちを見た。

「少し休憩しますか？ お茶淹れますね」

「そうだね」

花が厨房からお湯をもらつてきてお茶を淹れている間も、孔明はしぶしぶと言つた様子で至急案件の山の書簡に目を走らせている。

茶器を孔明の所へ運ぶと、孔明は湯呑を手を取つて、大きなため息をついた。

花はお茶のご相伴にあずかりながら、孔明の顔を見つめた。

ずいぶん疲れた顔をしている。眼の下には隈が出来てしまつているし、心なしか頬もこけてしまつている。ここ最近、夜も遅いようだ。執務室の奥に置かれた長椅子の上で、帰る

花から何かの拍子に教えてもらった単語を口にすると、花の視線が泳いだ。

その間も孔明の手は膝頭のある場所を、衣の上からゆつくりと撫でた。そこだけで足りるわけがなく、ころりと寝返りを打って邪魔な自分の身体の大半を寝台の上へと移動させ、かつ、花の太ももにも適度に重みが残って彼女が逃げられないようにする。

「目の前になまあしがあるのって、すごく強烈だったんだよねえ」

「あの、孔明さん……」
花が戸惑った声を上げるのを無視して孔明の手は少しづつ、上へと動いていく。触れているのか触れていないのか分からないほど、そっと。花がじれったく感じてしまふほど、ゆつくりと。孔明の指先は隠されている形を探るように、花の太ももを夜着の上から這っていく。

いつの間にか、花はぎゅつと目を閉じていた。
残念ながら寝所の薄明りの中では分からないけれど、きつと彼女の頬は赤く染まっていることだろう。

「意味が分かったみたいだね」

含み笑いをしながらも、孔明は容赦しない。

孔明の手は花の柔らかな太ももを探っていく。もう少しで足の付け根に触れるというところで、ようやく手の動きは止まった。

孔明の手はその場所から動かない。布越しだというのに、花にはその手が熱く感じた。

たまたらず、花は目を開けてしまった。そんな風にそっと撫

でられているだけでは、身体の中に熱が貯まるばかりだ。
「もっと触って欲しい？」

その質問に花が答えることも頷くことも出来ないでいるうちに、孔明は甘えるようにぎゅつと顔を花のお腹の辺りに押し当てた。

「わ、孔明さん?！」

「膝枕っていいよね。こんな風にすぐに触れるし」

くすぐりたい。くすぐりたいのに、それだけじゃない何かがあると感じてしまう。

孔明の手は太ももを離れ、今は花の腰の辺りを抱きかかえ、のみならずゆつくりと花の身体の形を探るかのよう、花の中の何かを呼び起こすかのよう、夜着の上を這っていく。腰の形をなぞり、背骨を辿るように手が上がっていく。

それとともに、ぞくりと甘い何かが背筋を駆け上がり、花は大きく息を飲んだ。

孔明はくすりと笑って身体を起こすと、花の顔に自らの顔を近づけていく。花の頬に手を伸ばし、なめらかな頬を撫でる。その刺激だけで、花は小さく震えた。孔明の指先は花の耳に触れ、さらに髪へと指を差し入れて髪を梳く。

大切にしたい、しあわせにしたいと思っているのに、こういう時、なぜか嗜虐心が芽生えるのは不思議だと、孔明は思う。愛おしくて大切にしたいくてたまらないのに、全てを奪ってしまいたい。

ゆつくりと唇を重ねるとまた花が震えた。反射的にだろう、身体を引こうとした彼女の背に回し抱き寄せた。舌先で花の唇をつつくと、呆気なく陥落して唇の力が抜ける。その隙を

逃さずに舌を差し挿れた。

逃げようとすると舌を捉え絡めると、孔明の胸元あたりの着物に花がぎゅっと握りしめた。

花の舌は熱かった。その熱を奪い取るように、孔明は花の唇内を蹂躪していく。舌を吸い、唇を甘噛みし、齒列を舌先で辿っていく。上顎を舌先で突くと花が鼻を鳴らした。

思う存分味わってから唇を放すと、孔明の息も花の息も、ずいぶんと上がってしまっていた。

「膝枕してもらったり、してあげたりしたけど」

孔明は花の目を覗き込んだ。

「……あの時も君にこうしたくて、気が狂いそうだった」

孔明が額をコツンと合わせると、花は恥ずかし気に視線を伏せた。

「わ、私だって恥ずかしかったんですよ」

「ボクだって恥ずかしかったけど、でも羞恥心なんて吹き飛ばすくらい、君がかわいかったんだよね」

「う」

「やっとなめられるようになったんだし、手を緩める気はないから、覚悟してね」

もつと花を味わいたいのだ。

何か言おうとした花の唇に、軽く唇を合わせて黙らせておいて、孔明はゆっくりと花の細い首筋に触れた。そして下へと指先を滑らせていく。襟元へ、そして夜着の上から細い肩へ、そして肩甲骨の形をなぞっていく。胸は花の呼吸に合わせて上下していた。その柔らかなふくらみにもそつと触れる。

「——っ」

花が顔を背けた。でもそれが面白くない。

「はーな、ダメだよ。こっちは向いて」

顎を掴んで正面を向かせると、花はもう涙目になっていた。泣かせたくなっていのに、どうして潤んだ瞳がうれしいのだろう。

花の唇が震えわずかに開く。誘われるように孔明は口付けを繰り返した。何度繰り返しても足るということがない。花の唇はやわらかく、唇内はあたたかく、舌は艶めかしく孔明を求めている。

孔明の手は花の胸の膨らみを、やはり衣の上からじらすようにゆっくりと動いていた。

いや、じらす「ように」ではない。

本当はもつとその柔らかさを味わうために、邪魔な布地など取り払って手で包み込んでしまいたい。唇で味わいたい。寝室に灯るわずかな明かりの中で、白く艶やかに浮き上がって見える肌を思う存分楽しみたい。

でも、それはもう少し先のこと。今はまだ、だめだ。

孔明は待っていた。花が焦れることを。もつと孔明が欲しくなることを。

膨らみの頂があるはずの場所を指先でひっかくように動かすと、口付けの合間から、甘い吐息が零れ落ちていった。

「孔明さん……」

切なげに名を呼ばれ、孔明は花の耳元で低く囁く。

「直に触って欲しい？」

恥ずかしいのか花は目を伏せてしまう。孔明は宥めるように、けれど逆効果だと知りつつ花の耳の縁を軽く噛んだ。花